

令和3年度 北信教育事務所・長野市教育委員会
合同指導主事研修会

国語科学習指導案

指導者 北信教育事務所学校教育課指導主事 目黒 哲朗 先生
日時 令和3年4月28日(水) 第4校時
授業学級 2年B組(40名)
授業会場 2年B組教室
単元名 「最も心惹かれる季節について考える 一枕草子、徒然草」
授業者 今井 悠太

I 本校全体の研究

- 1 目指す生徒の姿・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 国1
- 2 全校研究テーマ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 国1
- 3 研究の重点・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 国1
- 4 各教科等での育成を目指す資質・能力と各教科等の研究テーマ・ 国2

II 国語科の研究

- 1 国語科の研究テーマ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 国3
- 2 教科としての全校研究テーマの受け止め・・・・・・・・ 国3
- 3 研究内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 国3

III 単元の指導計画

- 1 単元名・学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 国5
- 2 単元の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 国5
- 3 単元の評価規準・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 国5
- 4 国語科として、全校研究テーマに迫るための仮説・・・・・・・・ 国5
- 5 単元に寄せた教材化・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 国5
- 6 単元展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 国9

- IV 参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 国11

信州大学教育学部附属長野中学校 国語科

研究者 今井 悠太 戸塚 拓也
北澤 峻 山口 学

I 本校全体の研究

1 目指す生徒の姿

学びを拓いていく生徒

2 全校研究テーマ

学びの本質に迫る学習の在り方

3 研究の重点

- (1) 問題発見・解決の過程において、各教科等の「見方・考え方」を働かせることができるようにする。 (重点1)
- (2) 学んでいることや学んだことの意味や価値を自覚することができるようにする。 (重点2)

昨年度までの成果と課題から、本年度は、目指す生徒の姿を「学びを拓いていく生徒」とし、研究を進めていくこととした。「学びを拓いていく生徒」とは、①「各教科等の資質・能力を身に付けていく生徒」と②「①を踏まえて、身に付けた資質・能力を他に生かしたり、新たに見いだした課題を解決しようとしたりしながら学び続けていく生徒」と、捉えている。

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説の第1章総説には、「これからの時代を生きる生徒は、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」と示されている。

このような力を育成するためには、中学校において、生徒が各教科等の「見方・考え方」を働かせて、各教科等の資質・能力の育成につなげていくことが求められている。「見方・考え方」そのものは資質・能力に含まれるものではないが、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、各教科等の学習と社会とをつなぐものである。また、本校では、学習の基盤となる資質・能力のうち、「問題発見・解決能力」が、生徒の生涯にわたる学びの基盤となるものと考え、研究の重点1を「問題発見・解決の過程において、各教科等の『見方・考え方』を働かせることができるようにする」と据えた。

各教科等で身に付けた資質・能力を他に生かしたり、新たに見いだした課題を解決しようとしたりしながら学び続けていくことができるようにするためには、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解するなど、生徒が各教科等の学習の有用性を認識していく必要がある。そこで、研究の重点2を「学んでいることや学んだことの意味や価値を自覚することができるようにする」と据えた。「学んだこと」だけでなく、「学んでいること」を付け加えたのは、単元や題材の学習において、「何のためにこの学習を行っているのか、そこにはどのようなおもしろさや社会とのつながりがあるのか」などを、生徒が自覚することで、学ぶことに興味や関心をもち、粘り強く取り組む中で、自己の学習を振り返って、次につなげるなど、生涯にわたって学び続けることにつながるのではないかと考えたためである。

各教科等の「見方・考え方」を働かせて、資質・能力を身に付けていくことが「各教科等の本質」であるとするならば、各教科等の枠を超えて、自ら「見方・考え方」を働かせて、物事を問い続けたり、追究したりして学び続けていくことを「学びの本質」と捉える。そこで、「学びを拓いていく生徒」を育成するために、全校研究テーマを「学びの本質に迫る学習の在り方」と据え、研究を進めていくこととした。

4 各教科等での育成を目指す資質・能力と各教科等の研究テーマ

各教科等の資質・能力を育成するため、本年度の各教科等の研究テーマを下記のように決め出した。

各教科等	各教科等で育成を目指す資質・能力	各教科等の研究テーマ
国語	国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力	文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成する力を高める学習の在り方
社会	広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎	社会に見られる課題の解決に向けて公正に選択・判断する力を高める学習の在り方
数学	数学的に考える資質・能力	結果や解決の過程を振り返って考える力を高める学習の在り方
理科	自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力	観察、実験の結果を分析して、解釈する力を高める学習の在り方
音楽	生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力	感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや美しさなどを見いだしたりする力を高める学習の在り方
美術	生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力	主題を生み出し豊かに発想し構想を練る力を高める学習の在り方
保健体育	心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力	運動が有する特性や魅力に応じて、その楽しさや喜びを味わおうとする力を高める学習の在り方
技術・家庭	よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力	社会や生活課題について多面的に検討し、最適な解決策を考える力を高める学習の在り方
英語	簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力	目的や場面、状況等に応じて、やり取りする力を高める学習の在り方
道徳	よりよく生きるための基盤となる道徳性	自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、道徳的心情を育むための学習の在り方
総合	よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力	問題解決的な活動を発展的に繰り返す力を高める学習の在り方
特別活動	様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して身に付ける資質・能力	学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決する力を高める学習の在り方

Ⅱ 国語科の研究

1 国語科の研究テーマ

文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成する力を高める学習の在り方

2 教科としての全校研究テーマの受け止め

『蛇足』の使い方について考える「一故事成語」(令和2年11月・1年)では、故事を読んで理解したことに基づいて、「蛇足」の使い方に対する自分の考えを確かなものにする学習を構想した。そこでは、故事の要約から見えてきた、「蛇足」の辞書的な意味に基づいて、単元の学習問題に対する自分の考えを見返す展開を位置付けた。

N生は、まず、「『蛇足』だが、あえて言わせてもらう」のように、自分の言葉の前置きとして使う言葉が『蛇足』である。」と考えた。その後、「蛇足」の故事を、「蛇の絵を速く描けた者が酒を飲めるという競争をしていた時、一番先に絵を描いた男が、余裕を見せて足を描き足したところ、別の男からそれでは蛇ではないと指摘されてしまい、酒を飲むことができなかつた話である。」と要約したN生は、「『余計な付け足しや無駄な行い』が、『蛇足』がもつ辞書的な意味である。」と考えた。そして、単元の学習問題に対する自分の考えを、「僕は、母に言われて折りたたみ傘を常に持っているけれど、天気の良い日の方が多く、実際には使わない場面の方が多い。だから、折りたたみ傘を毎日持ち歩くのは『蛇足』である、という使い方がよいのではないか。」と見返し、T生にこれを述べた。その後、N生は、T生から「折りたたみ傘は、数ある無駄のために持っているのではなく、たまにある必要な場面のために持っているのだから、『蛇足』を使う例にはならないと思う。」という指摘を受け、「『蛇足』は、やはり『余計な付け足しや、無駄な行い』を意味する言葉だ。ただし、これを日常生活の中で使う際は、その行いをした人から見ても、周りの誰から見ても、それが余計なことや無駄なことであると判断できる時に使うことが必要である。」とまとめた。このようなN生の姿を、「言葉による見方・考え方」を働かせて、文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成する力を高めた姿であると捉える。一方で、このようなN生の姿を、「蛇足」という一つの故事成語のみを学習対象にして、そのような力を高めた姿であると捉えることもできる。例えば、「人の幸、不幸は予測できない。」という意味をもつ故事成語「塞翁が馬」を提示し、「蛇足」との比較を行う活動を位置付けることで、N生は、故事成語そのものを学習対象にしたり、言葉そのものを学習対象にしたりしながら、文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成する力を高めることができたのではないかと考える。また、そのようにすることによって、学んでいることや学んだことの意味や価値をより自覚することができたのではないかと考える。

上記の実践から、単元の展開に対する課題や、それを、学んでいることや学んだことの意味や価値を自覚することにつなげていくための手だてに対する課題を本校国語科が抱えていることが見えてきた。そして、これらの課題について研究を推進していくことが、文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成する力を高める学習を行っていく上で必要であり、ひいてはそれが全校研究テーマ「学びを拓いていく生徒」の姿につながると考え、本研究を構想する。

3 研究内容

中学校学習指導要領(平成29年度告示)解説国語編第1章2(2)③では、「全ての領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し、『考えの形成』に関する指導事項を位置付けた」と示されている。これを踏まえて、古典を扱う本研究においても、「文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成する力を高めるための学習の

在り方」を研究テーマとして据え、研究を行う（図1）。

なお、松本（2021）は、中学2年生で扱われる「枕草子」第一段の学習を例に、「どの段階でも『わたし流の春は～～を書く』という活動が行われている。その『書く』言語活動が、読みの学習をきちんと反映したものになっておらず、ただ、自分の感覚だけで書く、読みと分断された活動になっているということもしばしば指摘されて来た」と述べている。これを本校国語科は、「『文章』を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成」していく学習過程の中で行われるべき「書く」言語活動が、「『自分の感覚』だけに基づいて、自分の考えを形成」していく学習過程の中で行われていることへの問題提起であると捉える。

このことから、本校国語科では、「文章を読んで理解すること」をいかに行うか、「文章を読んで理解したことなどに」いかに「基づいて、自分の考えを形成すること」を行うかといった二点に手だてを位置付け、研究を推進していくこととする。そして、これを通して、「2 教科としての全校研究テーマの受け止め」において詳述した本校国語科が抱える二つの課題の解決を目指す。



※上記の図は、以下のような構成となっている。



図1 文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成する力を高めるための3年間の構想

Ⅲ 単元の指導計画

1 単元名・学年 「最も心惹かれる季節について考える 一枕草子、徒然草」・2年

2 単元の目標 ※【 】内は、学習指導要領との関連を指している

(1) 知識及び技能 【(2)イ、(3)イ】

情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うとともに、現代語訳や語注などを手掛かりに文章を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知ることができる。

(2) 思考力、判断力、表現力等 【C(1)イ、オ】

目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得て、内容を解釈するとともに、文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

(3) 学びに向かう力、人間性等

言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>知① 情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使っている。【(2)イ】</p> <p>知② 現代語訳や語注などを手掛かりに文章を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知っている。【(3)イ】</p>	<p>思① 読むことにおいて、目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得て、内容を解釈している。【C(1)イ】</p> <p>思② 読むことにおいて、文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりしている。【C(1)オ】</p>	<p>態 季節を題材とした二つの文章の比較から見えてきた、清少納言と兼好法師の間にある季節や時間に対するものの見方や考え方の違いに基づいて、単元の学習問題に対する自分の考えを見返そうとしている。</p>

4 国語科として、全校研究テーマに迫るための仮説

(1) 重点1に関わる仮説

「枕草子」第一段と「徒然草」第十九段との比較から見えてきた、清少納言と兼好法師の間にある季節や時間に対するものの見方や考え方の違いに基づいて、単元の学習問題に対する自分の考えを見返す展開を位置付けることで、季節を題材とした二つの文章を比較して理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、最も心惹かれる季節に対する自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

(2) 重点2に関わる仮説

二つの文章の比較によって生徒が解釈したことを教師が価値付ける場を位置付けたり、二つの文章の比較や、それによって理解したことや考えたことと知識や経験との結び付けを行う際に、生徒が働かせた「言葉による見方・考え方」を、教師が板書によって可視化させながら全体追究する場を位置付けたりすることで、内容面と方法面のそれぞれについて、学んでいることや学んだことの意味や価値を自覚することができる。

5 単元に寄せた教材化

本単元の学習を行うに当たり、二つの文章(「枕草子」第一段と「徒然草」第十九段)の比較を取り入れる。これは、二つの文章を読むことが、「3 研究内容」にて詳述した松本が提起した問題を解決するために、以下のように有効であると考えためである。

今回の比較で扱う二つの文章は、それぞれの季節ごとに清少納言と兼好法師が心惹かれる事物を挙げているという共通点がある。したがって、二つの文章を比較して読むことで、

両人物が、それぞれの季節の中で心惹かれる事物や、最も心惹かれる季節などに違いがあることを解釈することができる。さらに、一日の短い時間の中に表れる事物の美に心惹かれる（以降、これを「瞬間美」と表記する）傾向がある清少納言に対し、数日、数か月に渡る長い時間の中で表れる事物の美に心惹かれる（以降、これを「永続美」と表記する）傾向がある兼好法師というように、両人物の間にある、季節や時間に対するものの見方や考え方の違いについて解釈することもできる。本校国語科では、ここに挙げた三つの解釈をする生徒の姿を、「現代語訳や語注などを手掛かりに文章を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方をすること（「知識及び技能」の【(2)イ】）」ができた生徒の姿、いわゆる「文章を読んで理解した」生徒の姿と捉える。

また、そのように「文章を読んで理解した」ことによって、単元の学習問題に対する自分の考えを、理解したことに基づいて見返すことができると考える。そしてこの見返しによって、清少納言と兼好法師、さらには現代に生きるそれぞれの人物がもつものの見方や考え方に共感したり、自身がもつものの見方や考え方を明確にしたりすることができる。本校国語科では、このような生徒の姿を、「文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること（「思考力、判断力、表現力等」の【C(1)オ】）」ができた生徒の姿、いわゆる「文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成した」生徒の姿と捉える。

以上のことから、本単元の学習を行うに当たり、二つの文章の比較を取り入れる。

(1)「枕草子」第一段と「徒然草」第十九段との比較から見えてきた、清少納言と兼好法師の間にある季節や時間に対するものの見方や考え方の違いに基づいて、単元の学習問題に対する自分の考えを見返す展開を位置付ける

第1時、教師は、最も心惹かれる季節を生徒に問う。そして、生徒とやり取りする中で、数百年もの昔の時代を生きた人物も、私たちと同じように季節について考えたり、それを文章に書き表したりしていることを紹介する。そして、その具体として、「枕草子」第一段と「徒然草」第十九段を提示する。これを受けて、生徒は、著名な二人の人物が同じ題材で文章を書いていることや、両人物がもつ季節に対するものの見方や考え方に対して興味・関心を抱いたり、それに触れることによって自分自身の季節に対するものの見方や考え方をさらに明確なものにしたいなどと願ったりするだろう。そこで、教師は、単元の学習問題「自分が最も心惹かれるのは、どの季節だろうか。」を設定し、二つの文章の比較を通して、単元の学習問題の解決を図ることを確認する。

第2～4時、生徒は、二つの文章の比較を行う。

まず、第2・3時、生徒は、清少納言や兼好法師が、どのような事物から季節を感じ、どの季節に最も心惹かれているのかについて追究する。そして、「清少納言は、『螢』や『鳥』など、生き物の姿から季節を感じている。でも、兼好法師は、『花橘』や『若葉の梢』といった植物から季節を感じていたり、『七夕』や『追儺』といった季節の行事から季節を感じていたりする。」などと、どのような事物から季節を感じているのかに関する解釈を行っていただく。また、挙げられている事物の数やそれぞれの季節について記された文章の長さの違い、さらには「あはれ」や「をかし」といった語句の使われ方の違い、「いと」や「三つ四つ、二つ三つ」などの強調表現などから、「清少納言が最も心惹かれている季節は秋であるのに対し、兼好法師は、秋のよさを認めつつも、春に最も心惹かれている。」などと、最も心惹かれる季節に関する解釈も行っていただく。そして、これら二つの解釈を基に、両人物がもつ季節に対するものの見方や考え方を結論付けようとする生徒が多いと、教師は考える（図2）。そこで、教師は、季節や時間に対するものの見方や考え方への解釈を行っていたり、それに対する気付きを無覚にしていたりする生徒を全体の場で指名し、紹介する。そして、事物と時間、季節と時間という点から、両人物がもつ季節に対するものの見方や考え方の違いを解釈する

ことができる可能性を指摘する。

第4時、教師は、第3時末のような解釈が可能かどうか、二つの文章から検討するように促す。その中で、生徒は、「清少納言は、『紫だちたる雲』や螢が『ほのかにうち光りて行く』などのように瞬間美に心惹かれていることが分かる。でも、兼好法師は、『青葉になりゆくまで』や『若葉の梢涼しげに茂りゆくほど』などのように、永続美に心惹かれていることが分かる。」などと、両人物の間には、季節や時間に対するものの見方や考え方の面でも違いがあると指摘するだろう（図3）。そして、これは、第3時末に二人の季節に対するものの見方や考え方を結論付けようとしていた生徒にとって新たな解釈になるとともに、そのようなもの見方や考え方をもちて単元の学習問題に対する自身の考えを見返そうとする生徒が出ると考える。

第5時（本時）、教師は、前時末の生徒の姿に触れた

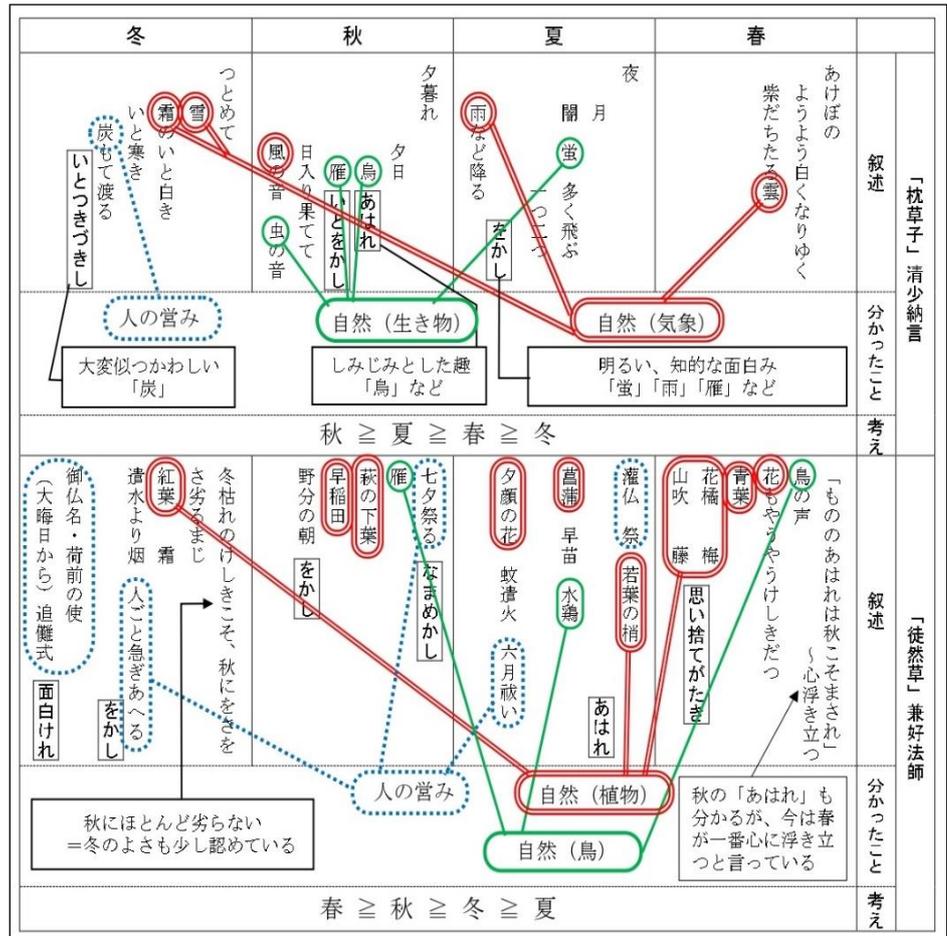


図2 第2・3時において予想される生徒のワークシートの例

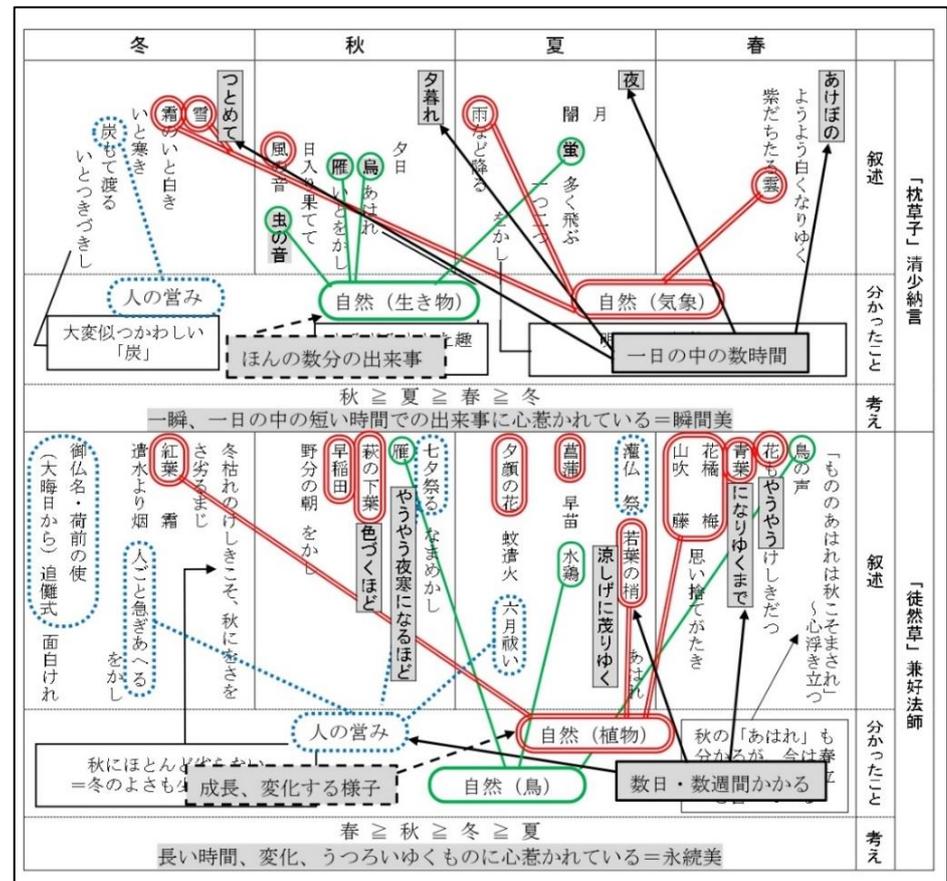


図3 第4時において予想される生徒のワークシートの例

後、「瞬間美、永続美のいずれの見方や考え方で事物を捉えているのか。」と生徒に問う。これに対して生徒は、「私は、瞬間美で捉えている。春に満開に咲く桜や、夏の夜に夜空を彩る花火など、一瞬しか見えないものに惹かれるからだ。」などと答えたり、生徒間にある、基づくものの違いを共有することを求めたりするだろう。そこで、教師は、瞬間美、永続美というものの見方や考え方から自分の捉えを見返す活動を位置付ける。そこでは、生徒は、両人物がもつ季節や時間に対するものの見方や考え方に対して、実際に自分が見たり聞いたり、感じたりしたことを結び付けて自分の考えを述べるだろう。その中で、「春や秋は永続美で事物を捉えやすいのに対し、夏や冬は瞬間美で事物を捉えやすい。だから、清少納言のように瞬間美で季節を感じるか、兼好法師のように永続美で季節を感じるかという二項対立ではなく、その季節に合った、捉え方であってもよいのではないか。」などと、季節ごとに適した時間と事物があるという折り合いをつけた考えをもつ生徒も現れてくるだろう。そして、それぞれの考えを説明し合い、全体で検討していく中で、生徒は、両人物がもつ季節や時間に対するものの見方や考え方と、生徒自身の知識や経験とを結び付け、自分の考えを広げたり深めたりしていくと考える。

最終時、教師は、生徒に、これまでの追究を基に、単元の学習問題に対する自分の考えをまとめるように促す。

このような単元の展開を位置付けることで、生徒は、「言葉による見方・考え方」を働かせ、文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成する力を高めていくことができるのではないかと考えた。

- (2) 二つの文章の比較によって生徒が解釈したことを教師が価値付ける場を位置付けたり、二つの文章の比較や、それによって理解したことや考えたことと知識や経験との結び付けを行う際に、生徒が働かせた「言葉による見方・考え方」を、教師が板書によって可視化させながら全体追究する場を位置付けたりする

本単元において生徒は、二つの文章の比較によって、解釈を行う。しかし、生徒が行う解釈の一つである、季節や時間に対するものの見方や考え方については、叙述の少なさから、そのように解釈してよいのか判断に迷う生徒が出ると考える。そこで、教師は、生徒の解釈を価値付ける場を位置付ける。具体としては、「枕草子」第二百十六段の「水晶などのわれたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ」や徒然草第三百七段の「花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは」などを生徒に提示し、解釈としてふさわしいことを伝えることを指す。これにより生徒は、自身の解釈に自信をもったり、それに基づいて、単元の学習問題に対する自分の考えを見返そうとしたりすると考える。

また、教師は、二つの文章の比較や、それによって理解したことや考えたことと知識や経験との結び付けを行う際に、生徒が働かせた「言葉による見方・考え方」を、板書によって可視化させながら全体追究する場を位置付ける。前者の「言葉による見方・考え方」の具体としては、線や矢印による事物同士の関係付け、「蛍」と「をかし」などの事物と評価語との関係付け、「三つ四つ、二つ三つ」などの表現方法による関係付けなどが挙げられる。後者の「言葉による見方・考え方」の具体としては、事物と五感との関係付けや、事物と心情との関係付けなどが挙げられる。これにより、生徒は、自身や友がどのような「言葉による見方・考え方」を働かせた思考をしているのかを明確にした上で、それを生かした全体追究を行ったり、全体追究後に自分の考えをまとめる際にそれを生かしたりすることができるかと考える。

このような二つの場を位置付けることで、生徒は、内容面と方法面のそれぞれについて、学んでいることや学んだことの意味や価値を自覚することができるのではないかと考えた。

6 単元展開 季節を題材とした二つの文章を比較して理解したことや考えたことを自分の知識や経験と結び付け、最も心惹かれる季節に対する自分の考えを広げたり深めたりする学習 全6時間扱い 本時は第5時

段階	◆学習		評価の観点	時間
	教師の指導・支援	予想される生徒の反応		
導入	◆二つの文章の比較を通して季節に対するものの見方や考え方を追究していくことに関心をもつ。 ・最も心惹かれる季節を生徒に問う。 ・古人も同じように、季節について考えたり、文章に書き表したりしていたことを紹介し、「枕草子」第一段と「徒然草」第十九段を提示する。 ・イのような生徒の反応から、単元の学習問題「自分が最も心惹かれるのは、どの季節だろうか。」を設定する。その後、学習への見通しをもつように促す。	ア 私が一番好きな季節は、春だ。気候が穏やかで暖かい日が多く、始まりの季節でもあるから、気持ちも新鮮になる。 イ 清少納言と兼好法師は、どの季節に心惹かれているのだろうか。二人のもつ季節に対するものの見方や考え方は、私のは違うような気がする。二人の季節に対するものの見方や考え方も参考にして、自分の考えを明確にしたい。 ウ 清少納言も兼好法師も、季節に対してそれぞれの考えがある。ただ、季節によって、挙げている事物が二人とも違う。しかも、事物の数も違う。清少納言は、春はあまり語っていないけれど、秋、冬は挙げている事物も文章も多い。まずは、どのような事物を挙げているか比べて読んでいこう。	態 (観察・ワークシート)	1
	◆二つの文章の比較を通して、古典に表れた季節に対するものの見方や考え方を知る。 ・ウのような反応から、学習課題「清少納言と兼好法師が挙げている事物や季節を評価する言葉に着目して、二人の考えを明らかにしよう。」を据え、季節ごと比較しながら追究するように促す。 ・比較する際は、事物や評価語との関係や事物同士の関係や分類などが視覚的に分かりやすくなるように、矢印や線などを用いて表したり、丸や四角で括ったりするように促す。 ・生徒の気付きを板書する際には、どのような「言葉による見方・考え方」を働かせた上での気付きであるのか分かるように明示する。 ・キのように結論をまとめ始めた生徒の反応を受け、季節や時間に対するものの見方や考え方への気付きがある生徒を全体で紹介する。 ・クのような反応から、学習課題「挙げている事物と時間との関係に着目して、二人の季節に対するものの見方や考え方を比べよう。」を据え、追究に入るように促す。 ・ケやコのような反応から、「枕草子」第二百十六段、「徒然草」第三百七十七段の一部の内容を紹介し、両人物のものの見方や考え方に対する解釈としてふさわしいことを伝える。 ・単元の学習問題に対する現時点での自分の考えをまとめるとともに、学習課題に対する振り返りを行うように促す。	エ 清少納言は、「蛩」や「鳥」など、生き物の姿から季節を感じている。でも、兼好法師は「花橘」や「若葉の梢」といった植物から季節を感じていたり、「七夕」や「追儺」といった季節の行事から季節を感じていたりする。 オ 挙げられた事物の違いもあるけれど、数も違いがある。清少納言は、春は一つの事物を挙げただけなのに対し、夏、秋は多く事物を挙げている。より多く事物を挙げている季節に心惹かれているのではないだろうか。 カ Aさんは、兼好法師が最も心惹かれているのは、春だと考えている。理由は、春を語る始めの文に『『ものあはれは秋こそまされ』と〜』と、秋のよさも認めつつ、今一番心浮き立つものは春の風物と述べているからだ。 キ 清少納言は、兼好法師のように一つの季節を推す表現はしていないが、「あはれ」や「をかし」という表現で事物を評価している。また、「いと」や数詞を使って強調していることから考えても、秋に最も心惹かれていると考える。 ク 確かに、清少納言より、兼好法師の方が挙げている事物や表現が長い時間の中で見ているように感じる。挙げている事物と時間との関係に目を向けて、二人の季節に対するものの見方や考え方を捉えてみよう。 ケ 清少納言は、「紫だちたる雲」や「蛩」が「ほのかにうち光りて行く」様子などの瞬間的なものに心惹かれている。 コ 兼好法師は、「青葉になりゆくまで」や「若葉の梢、涼しげに茂りゆくほど」など、植物がだんだんと成長していく長い時間の中でうつりゆくものに心惹かれている。 サ 兼好法師は、桜が咲く直前の枝の先端や満開を迎えていただける枝を、見る価値があるものとしている。やはり、長い時間の中での事物の変化に心惹かれている。また、清少納言の、「牛車の通るときに飛び散る水の様子を水晶のようだ」という表現は一瞬の出来事で、そこに心惹かれている。 シ 私は、清少納言のように瞬間美に心惹かれる。満開の時期が短い桜や、人との新たな出会いというその一瞬にしか味わえないものは素晴らしい。しかし、Bさんは兼好法師のように永続美に心惹かれている。私には馴染みのない考えだ		

		から、友の考えを聞きたい。 ス 二つの文章に取り上げられた事物の共通点・相違点を比較したり同じ作者の違う章段を読んだりすることで、文章に表れたものの見方や考え方を知ることができた。			
展 開	◆文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりする。				
	<ul style="list-style-type: none"> シのようなまとめを全体で共有し、互いの考えやその根拠をペアで共有するように促す。 セのような反応から、「瞬間美、永続美のいずれの見方や考え方で事物を捉えているのか。」と問うた後、学習課題「瞬間美と永続美という視点から単元の学習問題に対する自分の考えを見返そう。」を据え、追究するように促す。 板書をする際には、両人物がもつ季節や時間に対するものの見方や考え方や生徒の知識や経験との結び付きが分かるように明示する。 単元の学習問題に対する現時点での自分の考えをまとめるとともに、学習課題に対する振り返りを行うように促す。 	<p>セ 私は、瞬間美に季節を感じる人が多い。春だけでなく、夜空に花火が上がる時や、遠くから花火の音が届くのを聴いたときに夏を感じる。Bさんは、永続美に心惹かれ、雪解けが進み、植物が芽吹く様子が好きだから冬を挙げている。</p> <p>ソ 私の夏に対するものの見方や考え方は、清少納言と似ていると思う。夏だけでなく、他にも、春に桜が満開になる様子や秋に紅葉が鮮やかに色付く様子、冬に雪が降った日の朝の様子などの瞬間美で捉えた事物に心が惹かれるし、季節を感じやすい。</p> <p>タ Cさんは、兼好法師の永続美で季節を感じるものの見方や考え方に共感している。しかし、Cさんは、全ての季節で、永続美で季節を感じているわけではなく、春と秋は特に永続美で事物を捉えている。秋の紅葉は燃えるように色付いた瞬間もきれいだけれど、緑から徐々に赤く染まっていく変化や、盛りが過ぎ落ち葉になって段々と地面に落ちていくときにも、秋らしさを感じると言っている。これは、確かに秋のよさだ。</p> <p>チ Dさんは、春や秋は永続美で季節を感じやすいのに対し、夏や冬は瞬間美で季節を感じやすいと考えている。確かに、家を出たときに凜と張り詰めた冬の空気が頬に当たる瞬間に、私は冬を感じる。</p> <p>ツ 季節と時間という点で考えれば、清少納言の瞬間美に目を向けるものの見方や考え方も理解でき、兼好法師の永続美で捉えた事物に心惹かれるものの見方や考え方も理解できる。だから、どちらか一方に共感ではなく、季節によって考えが変わることが分かった。友の気付きも参考に、次の時間に自分の考えをまとめたい。</p> <p>テ 二人の季節に対するものの見方や考え方が違うように、私たちの間にも違いがあった。それは、その人が今までに見たり聞いたりして経験してきたことと深く関わっているのだろう。友に説明することで、そのような自分自身のものの見方や考え方を知ることができた。</p>	8分 30分 12分	思 ② (観察・ワークシート)	1 (本時)
終 末	◆単元の学習問題に対する自分の考えをまとめ、自らの学びや取組のよさを明確にする。				
	<ul style="list-style-type: none"> 単元の学習問題に対する自分の考えをまとめるように促す。 学習のまとめりごとに行ってきたまとめや振り返りを見返すとともに、単元を通した自らの学びや取組について振り返るように促す。 	<p>ト 清少納言や兼好法師の季節に対するものの見方や考え方には現代の私たちに通じるところがあり、多くの人は二人のものの見方や考え方の両面ももっていた。私は、春に一番心惹かれる。それは、満開に咲く桜という一瞬の美しさと、新芽が芽吹き、花が咲いて散り、新緑が生い茂るといった木々の変化の両方が好きだからだ。私は、春の力強さや生命力に心惹かれているのだと分かった。</p> <p>ナ 文章には作者の見方や考え方が表れることが分かった。違う作者の同じ題材で書かれた文章を比較したり、同じ作者の違う文章を比較したりすることでよりはっきりと分かる。文章の内容だけでなく、その背後にも目を凝らしたい。</p>		知 ② (ワークシート)	1

IV 参考文献

松本修(2021). 教育科学国語教育 2月号・854号. 明治図書出版 p.90